# □ ピアノ

真 嶋 雄 大

東日本大震災のあった2011年以降，その直接的な影響や景気の低迷，またゴーストライターによる世紀の大スキャンダル，中村紘子の逝去など大きな話題が続いたが，2017年の音楽界，鍵盤界は世界的なピアノ・コンクールも少なく，粛々と推移したような印象がある。

その中村紘子が1996年から毎年音楽監督を務めてきたのが浜松国際ピアノ・アカデミー。当時浜松国際ピアノ・コンクールの審査委員長にあった中村が，コンテスタントたちのレベルに危機感を抱き，セミナーの創設を提唱，後にチャイコフスキー・コンクールの覇者である上原彩子をはじめとする世界的な若きピアニストたちを多々修了生として輩出してきたが，中村の他界によって第21回をもって閉幕することとなった。集大成となる今回も例年通り３月に開催され，レッスンやセミナー等の他，教授陣による「中村紘子メモリアル・ガラコンサート」やシンポジウムが開かれ，中村の功績を偲ぶとともに，将来への展望が議論された。

セミナー関連であるが，田崎悦子が2003年に山梨県・清里で立ち上げたのがピアノ・セミナー「Joy of Music」。その発展形である，ピアノを軸とした室内楽セミナー「Joy of Chamber Music」が創設され，カワイ表参道パウゼを舞台にこれまで堤剛や篠崎史紀らを迎えての充実した教育活動を行ってきたが，今回も３月にピアノデュオ・デュオールをゲストに，指導や演奏が繰り広げられた。

また静岡音楽館AOIを拠点に，館長でもある野平一郎が毎年開催している「ピアニストのためのアンサンブル講座」。講師である野平をはじめ，漆原啓子（ヴァイオリン），川本嘉子（ヴィオラ），寺谷千枝子（メゾソプラノ）の各氏が共演しながら指導するという他には例を見ない斬新な試みであり，今回で11年目を迎えた。その半年にわたる講座の修了記念コンサートが１月８日に行われたが，数多くの聴衆が詰めかけ，地域にもしっかり根付いている感触を得た。

毎年多々開かれる音楽祭から話題を拾うと，第19回を迎えた別府アルゲリッチ音楽祭では，マルタ・アルゲリッチと小澤征爾指揮水戸室内管弦楽団との共演が実現，それに先だって水戸でも共演，ともにベートーヴェン「ピアノ協奏曲第１番」で超大物同士が比類ない音楽的感興を紡いだ。また諏訪内晶子が芸術監督を務める第５回国際音楽祭が７月に開かれ，ボリス・ベレゾフスキーが登場，ソロに加え，諏訪内，マリオ・ブルネロなどとの共演で存在感を示した。

毎年，カワイ表参道パウゼで開催される「ショパン・フェスティバル2017」が昨年も催され，テーマは「ワルツ」。青柳いづみこや楠原祥子らによるレクチャー・コンサート，花房晴美，青柳晋，白石光隆らによるワルツの演奏が行われた。また会期中，日本国内でもっとも優れたショパン演奏に贈られる「日本ショパン協会賞」の第43回が，岸美奈子に決定，発表された。

受賞関連では，小山実稚恵が第67回芸術選奨音楽部門文部科学大臣賞受賞，盛大なパーティーも開かれたが，小山実稚恵が2006年にBunkamuraオーチャードホールでスタートさせた，12年間全24回のリサイタルシリーズがついに完結。最終回となった11月25日には，「永遠の時を刻む，銀・別世界へ，内から発する光」というテーマのもと，J.S.バッハ「平均律クラヴィーア曲集」第１番からシューマン，ブラームス，ショパン，そしてベートーヴェン「ソナタ第32番」などが恐るべき説得力とともに演奏され，長きにわたる重厚なシリーズの有終の美を飾った。また第48回サントリー音楽賞には小菅優が選ばれ，CD「ベートーヴェン・ソナタ全集」の完結や，他の高度な演奏が評価された。さらに第27回出光音楽賞，ピアニストとしては反田恭平が受賞。その反田は６月のN響「iMusic　Tomorrw 2017」において，ローレンス・レネス指揮N響と共演，イギリスの作曲家マーク・アントニー・ターネイジの「ピアノ協奏曲（2013）」を日本初演し，喝采を浴びた。

さて来日ピアニストも相変わらず，活況を呈した。若手では，先のショパン・コンクールの覇者であるチョ・ソンジンをはじめ，1992年生まれのキット・アームストロングが自らの溌剌たるピアニズムを示し，また18歳でモントリオール国際音楽コンクールに優勝，ヴァン・クライバーン国際でも第２位に入賞した新星ベアトリーチェ・ラナは，J.S.バッハ「ゴルトベルク変奏曲」で鮮烈な演奏を聴かせた。ちなみにラナは，前述の浜松国際ピアノ・アカデミーのコンクールで，牛田智大とともに第１位を獲得している。また何かと話題のフランチェスコ・トリスターノも，自作や現代作家作品による先鋭的な「アコースティック・テクノ/アンプラグド・ライヴ」を開催，耳目を集めた。

一方10月には，93歳10ヵ月になるメナヘム・プレスラーが来日し，モーツァルト，ドビュッシー，ショパンなどでリサイタルを開き，大きな感銘を与えるとともに，またサントリーホール室内楽アカデミーにも，元気な姿を見せた。むろんプレスラーに限らず，ベテラン勢も元気である。シフ・アンドラーシュは，ウィーン古典派の４人の作曲家，ハイドン，モーツァルト，ベートーヴェン，シューベルトの最後のソナタを集中的に採り上げるリサイタルで深遠なる境地を示し，ミシェル・ダルベルトは洒脱なフォーレやフランク，ブラームスなどを，４月のアンヌ・ケフェレックはJ.S.バッハ，スカルラッティ，ヘンデル，シューベルトを，アンジェラ・ヒューイットは２回来日してJ.S.バッハで独特の解釈を表した。また６月にはダン・タイ・ソンがこれまであまり採り上げて来なかったシューベルトで新しい心境を提示し，メシアンのスペシャリストでもあるロジェ・ムラロは，メシアン「エローに棲まうムシクイたち」という作品をトッパンホールで世界初演，またそれに先立ってシンポジウムも開かれ，大いに注目された。

もちろん日本人ピアニストたちの活動も積極的だ。メモリアル・イヤーに限れば，40周年を迎えた花房晴美は，記念CD「フランス室内楽作品集」をリリース，10月には東京文化会館で記念リサイタル「ベル・エポックへのオマージュ」でドビュッシーなどを演奏した。またデビュー30周年を迎えた仲道郁代は，今後の10年，即ちベートーヴェン没後200年と自らの40周年が重なる2020年に向け，毎年テーマを掲げる大掛かりなシリーズをスタートさせた。さらにデビュー40周年を迎えた斎藤雅広は，記念CD「ナゼルの夜会」をリリース，関連イベントとしてティアラこうとうでの「下校時間のクラシック」や，最近では若手演奏家のプロデュースにも意欲的だ。

他にも，左手のピアニスト舘野泉はヘルシンキで80歳記念演奏会を開催，舘野に捧げられた２つのピアノ協奏曲，光永浩一郎「泉のコンセール」，エスカンデ「村の楽師たちの肖像」で聴衆を熱狂させた。さらにアメリカの作曲家ギロックの生誕100年を記念した日本でのコンサート・イベントでは，それぞれギロックのメモリアルCDをリリースしている三舩優子と熊本マリ，小原孝が登場，会場を熱く盛り上げた。

ピアノ・メーカーに関しては，まず創業130年を迎えたヤマハは，グランドピアノSシリーズがモデルチェンジされ，SXシリーズとして７月にリリース，S３Xが10月１日，S６Xが今年１月10日に発売され，またクラビノーバでの新製品４機種17モデルを発表，カワイは第１回Shigeru　Kawai国際ピアノコンクールを８月に開催，三浦謙司が優勝した。スタインウェイ・ジャパンは設立20周年を迎え，５月に設立20周年記念コンサートを王子ホールで開催，また５月15日からは「スタインウェイ&サンズ東京」として，小売部門を創設して直接販売を開始している。またベーゼンドルファー・ジャパンでは，スタンダード・モデルの他，華燭・デザインモデルとして，全世界25台限定のクリムトの「アデーレ・ブロッホ＝バウアーの肖像Ｉ」をピアノの蓋の裏側にあしらった「Woman in Goldモデル（クリムト・シリーズ２）」を発表，世界的に注目を浴びている。そしてヨーロッパのメーカーで唯一，自社製ハンマーの製造を開始しているベヒシュタインは，従来の技術をさらに磨き，多彩なシリーズを開発，リリースしていて好評だ。